

## 国際通貨ペソの系譜

大原美範

### 目次

はしがき

一、新大陸産金銀のスペインへの流入

二、ペソの誕生

三、スペイン通貨の容量の切下げ

四、メキシコ・ドル

五、北アメリカ英領植民地の通貨

六、中国におけるペソの流通

七、日本への流入と貿易銀

八、香港におけるメキシコ・ドル

九、海峡植民地のメキシコ・ドル

一〇、アジアにおけるスペインの拠点・マニラ

一一、貿易銀

結び

## は し が き

国際決済制度が整備されるのは一九世紀にイギリスの通貨ポンドが国際金融に重要な地位を占めるようになってからであるが、それに先立つ時代についてみるならば、スペインが鑄造した銀貨が国際的決済並びに計算単位として広く用いられていた。当時の貨幣は金属貨幣であって、貨幣自体が価値をもっていなければならなかったが、スペインの銀貨は銀容量が充実し、比較的通貨価値が安定していたことから、ヨーロッパ、北アメリカの英領植民地および東アジア地域において広く流通手段として用いられた。その原因はアメリカの植民地における銀鉱の増産により、スペインの銀貨は当時屢々みられた鑄貨の品質の著しい低下を避けることができたからである。<sup>(1)</sup>

一六世紀から一七世紀にかけてヨーロッパ各地間の取引に使用された貨幣は主にオーストリア、オランダ、スペインの貨幣であったが、一七世紀末になるとオランダの通貨がヨーロッパの決済通貨としての地位を高め、他方植民地で鑄造されたスペインの銀貨は北アメリカの英領植民地および東アジア諸地域での決済手段としての地位を高めた。

一七～八世紀にスペイン銀貨の利用は多くの国に普及しており、一八世紀の貨幣事情を分析したフランスの経済学者ミシェル・シュヴァリエは「スペイン貨幣は世界最初の貨幣であると長い間誤解されており、学者も商人もそういうものとして認めていた」と述べていた。<sup>(2)</sup>

やがてスペインのハレアル銀貨は大量に銀を産出した新大陸植民地のメキシコでも鑄造されるようになり（一五三五年）、一五三七年から製造を開始した。リマではそれより遅れて一五六五年、ポトシでは一五七二年に鑄造が始まった。これはそれぞれの地域での銀生産が最大になった時期に一致する。

これら新大陸で鑄造されたハレアル銀貨はペソと呼ばれ、スペイン領植民地とは対照的に植民地での貨幣の鑄造を

認めなかった北アメリカの英領植民地でも貨幣として用いられるようになり、やがて米国が独立するとき米国で制定された貨幣の原型となった。

次いでペソはアジアにおけるスペイン領植民地であったフィリッピンに入り、さらにスペインとの交易を通じて中国大陸に流れ、ここでは国内通貨としても用いられるようになった。

その結果東アジアの貿易決済にハレアル銀貨が広く用いられると、欧米の主要国でもアジアにおける決済通貨としてペソに類似の銀貨を製造し、東アジアにおける貿易決済に利用した。

米国が日本に開国を求め、通商関係を開始したときに、米国に流通したペソ貨は日本にも入り、やがて明治維新政府のもとで日本の新通貨制度に影響を及ぼすことになる。

ペソは元来スペインの一地域カスティリヤのハレアル銀貨に付けられた呼称であったが、新大陸での莫大な銀生産に支えられて広く世界の決済通貨として用いられ、イギリスのポンドが一九世紀の世界に第一の国際決済通貨として登場するまで、特にアメリカ大陸および東アジアにおいて大きな影響力を発揮した。

本論文のねらいは、スペイン鑄造の銀貨であったペソが世界各地に流通し、ポンドが国際金融に王座を占める以前の時代に国内用は勿論、国際決済通貨としても広く用いられた実態を明らかにし、その理由を検討しようとするものである。

### 一、新大陸産金銀のスペインへの流入

新大陸植民地において大量の銀貨が鑄造され、額面価値にはほぼ等しい銀容量を持ち続け、広く信用を維持していたのはアメリカのスペイン領植民地に大量の銀を産出したからにはかならない。また当時世界に雄飛したスペインの国

表1 金銀のスペインへの5年毎の輸入額（単位：ペソ）

期 間	公 共	民 間	計
1503-1505	97,216.5	273,838.8	371,055.3
1506-1510	213,854.0	602,382.5	816,236.5
1511-1515	313,235.0	882,318.5	1,195,553.5
1516-1520	260,217.5	732,979.0	993,196.5
1521-1525	35,152.5	99,017.5	134,170.0
1526-1530	272,070.5	766,366.5	1,038,437.0
1531-1535	432,360.5	1,217,870.5	1,650,231.0
1536-1540	1,350,885.0	2,587,007.0	3,937,892.0
1541-1545	757,788.5	4,196,216.5	4,954,005.0
1546-1550	1,592,671.5	3,916,039.5	5,508,711.0
1551-1555	3,628,506.5	6,237,024.5	9,865,531.0
1556-1560	1,568,495.5	6,430,503.0	7,998,998.5
1561-1565	1,819,533.0	9,388,002.5	11,207,535.5
1566-1570	3,784,743.0	10,356,472.5	14,141,215.5
1571-1575	3,298,660.5	8,607,948.5	11,906,609.0
1576-1580	6,649,678.5	10,602,262.5	17,251,941.0
1581-1585	7,550,604.0	21,824,008.0	29,374,612.0
1586-1590	8,043,212.5	15,789,418.0	23,832,630.5
1591-1595	10,023,348.5	25,161,514.0	35,184,862.5
1596-1600	10,974,318.0	23,454,182.5	34,428,500.5
1601-1605	6,519,885.5	17,883,442.5	24,403,328.0
1606-1610	8,549,679.0	22,855,528.0	31,405,207.0
1611-1615	7,212,921.5	17,315,199.0	24,528,120.5
1616-1620	4,347,788.0	25,764,672.0	30,112,460.0
1621-1625	4,891,156.0	22,119,522.5	27,010,678.5
1626-1630	4,618,801.0	20,335,725.5	24,954,526.5
1631-1635	4,733,824.5	12,377,029.5	17,110,854.0
1636-1640	4,691,303.0	11,623,299.0	16,314,602.0
1641-1645	4,643,662.0	9,120,140.5	13,763,802.5
1646-1650	1,665,112.5	10,105,434.5	11,770,547.0
1651-1655	2,238,878.0	5,054,889.0	7,293,767.0
1656-1660	606,524.0	2,754,591.5	3,361,115.5
計 1503-1660	117,386,086.5	330,434,845.8	447,820,932.3

（出所） Earl J. Hamilton, *El tesoro americano y la revolución de los precios en España, 1501-1650*, p. 47.

力ならびにそれを背景にした経済力が通貨への信頼性を支えていたものといえよう。  
アメリカ大陸に産出した銀がヨーロッパにもたらされた量はどの位になるのか、ハミルトンは表1の数字を示している。



表2 新大陸からスペインへの金銀（純）の10  
年毎の輸入量 (単位: kg)

期 間	銀	金
1503-1510	...	4,965
1511-1520	...	9,153
1521-1530	148	4,889
1531-1540	86,193	14,466
1541-1550	177,573	24,957
1551-1560	303,121	42,620
1561-1570	942,858	11,530
1571-1580	1,118,591	9,429
1581-1590	2,103,027	12,101
1591-1600	2,707,626	19,451
1601-1610	2,213,631	11,764
1611-1620	2,192,255	8,855
1621-1630	2,145,339	3,889
1631-1640	1,396,759	1,240
1641-1650	1,056,430	1,549
1651-1660	443,256	469
計 1503-1660	16,886,815	181,333

(出所) Earl J. Hamilton, *El tesoro americano y la revolución de los precios en España, 1501-1650*, p. 55.

一六世紀の最初の三〇年間に金銀の輸入は年平均一五万ペソと少額であるが、一五三一―一六〇年間に急速に増加し、年平均一一三万ペソになった。一五六一―一八〇年間には続いて増加したが、年平均二七二万ペソと増加率は低下した。一六世紀最後の二〇年間には前の期の二倍に増加した(年平均六一四万ペソ)。

金、銀の輸入量を重量で示すと、一五三〇年までは金が圧倒的に多かったが、一五三〇年代から銀の供給が多くなり、一五六〇年代には逆に銀の船積みが圧倒的に大きかった。一五九〇年代に銀は金の一三九倍になり、金銀比価が一对一五であったとしても銀は金をはるかに上回る生産量であった。金は一五八〇、九〇年代に再び増加したが、一五五〇年代の水準に戻ることはなく、一六二〇年代以降はむしろ低下した。

スペインへの金銀の輸入は一七世紀に入って減少し、一六三〇年代以降一層低下した。特に金の減少は著しかった。これはスペインが金属と交換にアメリカに送るべき商品を生産する力を失った結果である。最も著しい低下は、一六四〇年代に起きた。当時ポルトガルおよびカタルーニャが反乱をおこし、一六五九年にはピレネー条約によってルション地方をフランスに割譲した。また一六五一―一五二年にはバルセロナに疫病が蔓延した。貴金属輸入の減少は

表 3 Soetbeer による金・銀の世界  
生産量 (年平均, キログラム)

	金	銀
1541-60	8,510	311,600
1601-20	8,520	422,900
1621-40	8,300	393,000
1641-60	8,770	366,300
1661-80	9,960	337,000
1681-1700	10,765	341,900
1701-20	12,820	355,600
1721-40	19,080	431,200
1741-60	24,610	533,145
1761-80	20,705	652,740
1781-1800	17,790	879,000
1801-20	17,778	894,150

(出所) Pierre Vilar, Oro y Moneda en la Historia 1450-1920, pp. 274-277.

スペインの経済力および商業的魅力の喪失に対応するものであった。<sup>(3)</sup>

ピエール・ヴィラルは世界の金および銀の生産量についてセートベア Soetbeer による統計を紹介しているが、他に存在しないということ、必ずしも正確とはいえない、としている。<sup>(4)</sup> この統計数字によれば、生産は一時低下したが、アメリカからセヴィリャへの輸入量よりは低下の速度は小さかった。一六八〇年から銀生産の減少はとまり、金生産より早い率で増加し始めた。

以上の数字からも当時の世界の金銀生産量に対比してスペインへの金銀特に銀の流入がいかに大きかったかを知りえよう。

当時ヨーロッパで最大の銀産地であった南ドイツ地方の年産額は、多く見積っても数万キログラムという水準であったことからみても、新大陸から流入した銀の量はきわめて大きなものであった。しかし年産額からみれば大きなものではあったといえるが、長期にわたって蓄積されたヨーロッパの貴金属の量に比べれば、この期間に流入した新大陸の金銀は大きめにみてもその五〇％に過ぎない、とみられる。<sup>(5)</sup>

メキシコの金鉱は南部の熱帯地方にあるが、銀鉱は北部の年間雨量が五〇〇ミリメートルの地域に沿って存在した。これら鉱山の多くは一五四六年から五六年間に開発され、ある鉱床は一八世紀に最大の生産量に達したところもある。

表4 ポトシの年平均銀産量

1556～58	2,227,782	ピアストラ
1579～1736	3,994,258	〃
1737～1789	2,458,606	〃

(出所) Pierre Vilar, Oro y Moneda en la Historia 1450-1920, p. 415. (フンボルトの計算)

表5 グァナファートの年平均銀産量

1766～1775	3,032,050	ピアストラ
1776～1785	4,669,286	〃
1786～1795	4,868,266	〃
1796～1803	4,913,265	〃

(出所) 表4に同じ。

一五六〇年頃ドイツ人の手によって水銀アマルガル法として知られる技術がもたらされてから生産量に決定的な変化を生じた。銀含有量が乏しい銀鉱からの銀抽出も可能になったからである。

メキシコの銀生産量は一六世紀末頃にはペルーの生産の半分位であった。しかし一八世紀になってメキシコの銀生産はきわめて大きなものになった。メキシコの銀生産が一八世紀後半に著増したことは貨幣の鑄造が活発化したことと密接な関係をもっている<sup>(6)</sup>。一八世紀末頃にアメリカの金銀生産の三分の二はメキシコに産出した。フンボルト Alexander von Humbolt はその著 Political Economy on the Kingdom of New Spain に詳細な記録を残している。メキシコ産の銀は年々ベラクルスからヨーロッパに、アカプルコからアジアに輸出されたが、半分はグァナファート、サパテカス、カトルセから生産された。グァナファートのみで総量の四分の一を占めた。ベラクルスはメキシコ産銀の三分の二を輸出した。グァナファートは一八世紀に、一六世紀にポトシが生産した以上の銀を生産した<sup>(7)</sup>。

フンボルトはスペインの記録に基づいてポトシとグァナファートの銀生産量を次のように記録している。グァナファートにおいては年に四、五〇〇、〇〇〇ピアストラを生産した。これは一六世紀の最高年よりも大きい。フンボルトの記録では、生産の急増は一七七五―七六六年におきている。これは明らかにヨーロッパにおける物価動向に関係している<sup>(8)</sup>。

## 二、ペソの誕生

新大陸の発見に伴って巨額の金銀、特に銀がスペインにもたらさ

れ、一六世紀における著しい経済発展と並んで物価の上昇、いわゆる価格革命をひき起こした。

流入した巨額の銀は海外からの輸入品の決済に当てられたが、それが鑄造銀貨の形をとったので、スペインで鑄造された銀貨は国際決済手段として世界で広く用いられた。当時はまだ金融組織は今日のように発達していなかったのだ、金属貨幣であるスペインの銀貨が国際決済に広く用いられるとともに、貨幣制度が未発達な国においては国内貨幣としても用いられ、スペインの銀貨が国内国外の決済手段としてきわめて重要な役割を果たした。一九世紀になればイギリスの通貨ポンドが国際金融界に決定的な役割を演じ、二〇世紀になれば米国のドルが圧倒的な力をもったが、一九世紀まではスペインおよびその植民地において鑄造された銀貨が国際決済にきわめて大きな力をもっていた。

一四六九年、カステイリヤの王位継承者イサベラとアラゴンの王位継承者フェルナンドの結婚によってスペインの政治は画期的な変化をとげたが、両王の共治、同権の原則によってカステイリヤとアラゴンは相互に介入しないことを基本とした。このため両国の統一政策といえるものは少なかったが、カトリック両王の唯一の統一政策といえるものは貨幣制度であった。しかしその貨幣制度すらも、カタルーニャ、バレンシア、カステイリヤでそれぞれ独自の金貨を鑄造したが、実質的な統一的措施はないに等しかった。<sup>(9)</sup>

スペインにおける貨幣の鑄造は一五〇四年にイサベルが死亡したあとも大きな変化はなかった。カルロス一世時代にはカステイリヤ、レオン、カタルーニャ、アラゴンなどの領土においてそれぞれ貨幣を鑄造していたが、それは彼と彼の母ファナ（一五五五年に死亡するまで）の名において発行された。

変化があらわれるのはカルロス一世時代の後半であって、独自性のある貨幣が発行された。一五三七年に新しい金貨（一〇レアル銀貨または三五〇マラヴェディ貨と同等のエスクド貨）が導入された。コ罗纳貨とも呼ばれ、三・三八グラム、品位千分の九一六・六であった。この金貨は後のスペイン王国での金貨の基本単位となり、同世紀の半ば頃まで

高く評価された。

銀貨ではフェルナンドとイサベル両王時代に鑄造が始まった八レアル銀貨 (real de a ocho) が一五四〇年代に本格的に鑄造された。この貨幣は大量にセビーリャ、トレード、ブルゴス、セゴビアの造幣所で鑄造された。この時代に貨幣鑄造が初めて製造工場方式で行われたことは注目される。<sup>(10)</sup>

新大陸の発見に伴って金銀、なかんずく銀が大量に生産され、莫大な量の銀が輸入されるようになってからスペインに八レアル銀貨の鑄造が一層盛んになった。同時に新大陸の植民地でも銀貨の鑄造が行われた。一五三五年五月一日の女王ファナの法律によりメキシコ市で新世界最初の造幣所が建設され、一五三七年に銀貨の製造が始まった。一五四二年にリマを首府とするペルー副王領が設けられると、一五六五年リマに造幣所が設けられ、一五七二年にはポトシでも鑄造された。ここでつくられた貨幣は主として八レアル銀貨であった。<sup>(11)</sup>

八レアル銀貨 real de a ocho は当初スペイン本国において鑄造されたが、新大陸においても大量の銀生産を背景に巨額に鑄造され、一六世紀遅く、一七世紀早く、世界通貨の基礎をつくった。英語では the pieces of eight と呼ばれ、銅製貨幣の単位マラヴェデイスで表現すれば二七二マラヴェデイス (一レアルは三四マラヴェデイス) であった。それはまたペソ peso と称された。従ってペソは本来の通貨単位ではなく、計算貨幣であって、peso fuerte とか、peso duro と呼ばれた。後にはピアストラ piastra と呼ばれ、ドルの先駆者となった。

スペインの通貨単位は銀貨ではレアル real である。一四九七年の法律で一レアル銀貨は総重量三・四三三グラム、純銀量三・一九四グラムと定められた。これから八レアル銀貨は四二三・七二六グレイン、二七・四六八グラムとされた。しかし実際に流通している八レアル銀貨の銀容量は必ずしも正確ではなく、平均して純銀二三・三六グラムであって、やがて世界になだれこんで広く国際決済に用いられた。<sup>(12)</sup>

現実にペソはスペイン本国よりはむしろ植民地の造幣所で鑄造されたスペインの銀貨 *real de a ocho* (レアル・デ・ア・オチヨ) の呼び名であり、当初はヌエバ・エスパニーヤ (現在のメキシコ)、後には全インディアス (スペイン領アメリカ) において鑄造されたハレアルの銀貨であった。

一ペソ銀貨は北アメリカの英領植民地にも流入した。米国の独立後法貨を決定するに当って、英語では *piece of eight* と呼ばれたペソ貨がそのモデルになった。ペソ貨は厳密に言えば必ずしもその銀容量は均一ではなかったが、もっとも一般的な貨種は四二三・七グレイン (二七・四五六グラム) の総重量をもった<sup>(13)</sup>。

当時ヨーロッパでは東方からの金の交通路がオスマン・トルコによって遮断され、ヨーロッパにおける金鉱の新たな開発も進まなかったので、貴金属が不足していた。そこに生じた新大陸からの大量の貴金属の流入、特に銀の莫大な量の流入はヨーロッパに金銀貨の不足を補うに足る銀貨、それも大型銀貨をつくりだす傾向を生じた。

大型銀貨の典型としてヨアヒムスターレル *Joachimsthaler* があつた。このターレルはボヘミアの一州で一五一七年に鑄造された銀貨である。ターレル銀貨は大型の銀貨で、広く信用をえて流通し、ヨーロッパの鑄造貨幣の典型になった。ターレルは英語ではなまってドル *dollar* と呼ばれた。ドイツで法貨として採用されると *Reichsthaler* となり、英語では *rix-dollar* という言葉も生まれた。大きさ並びに銀含有量はペソと似ていたので、ペソをもドル *dollar* と呼ぶようになり、「スペイン・ドル」とも言われた<sup>(14)</sup>。メキシコで鑄造されるようになるとメキシコ・ドルとも呼ばれ、アジア、アフリカを含む全世界に流通した。

### 三、スペイン通貨の容量の切下げ

スペイン本国では一五八八年無敵艦隊がイギリス艦隊に撃破されたのを境に次第に国勢は低下し始めた。特に繊維



表 6 カスティリヤの法定金銀  
比価

	金 1 に対し
1497-1536	10.11
1537-1565	10.61
1566-1608	12.12
1609-1642	13.33
1643-1650	15.45

(出所) Earl J. Hamilton, *El Tesoro Americano y la Revolución de los Precios en España, 1501-1650*, p. 85.

工業は一六世紀に隆盛をみせたが、同世紀末から一七世紀初めにかけて著しい衰退を記録した。このためスペイン本国の経済情勢は一七世紀に入って悪化し、アメリカからの銀流入は二年にわたり激減し、銀の保有は減少した。その結果、一六八六年にはスペイン本国で鑄造されたレアルの銀含有量を二〇%引き下げた。これはフェルナンドとイサベラの時代以来初めての切下げであった。その後も銀の純分および銀貨重量について屢々法令の変更があり、その内容は変化した。この措置によってスペイン本国の経済の悪化を改善することはできたが、国際通貨としての信頼性は失われた。<sup>(15)</sup>

しかしスペイン本国での銀貨の切下げは植民地での銀貨鑄造には適用されなかった。特にピアストラあるいはハレアル銀貨は古い銀容量を維持し、「新しい銀」と「古い銀」の区別も設けられた。このため植民地で鑄造された銀貨は本国製よりは二〇%高い価値をもち、国際的権威を損なうことはなかった。<sup>(16)</sup>従って新大陸鑄造の銀貨は北アメリカには勿論、アジア諸地域でも決済通貨として依然として使用され続けた。<sup>(17)</sup>

スペイン本国の経済はこの措置によって好転し始めた。金銀比価は一六・四八倍になり、ヨーロッパ市場におけるより高い比率に変わった。当時ハンブルグでは一四・八〇、イングランドでは一五・三九であった。金の価値を高めたので金はスペインに流入した。当時のスペイン経済はイングランドがもったほどの魅力を備えていたわけではない。それにもかかわらず金の流入によってカスティリヤの通貨は強化された。通貨は一四年間安定を続け、カスティリヤの物価はヴァレンシア、カタルーニャと並んで徐々に上昇傾向をたどった。<sup>(18)</sup>

スペイン本国で発行する硬貨は植民地で発行する硬貨に比べて銀容量が著しく低いという二重本位制度は一七一六年に確認され、フェリペ五世のもとで新用語が与えられた。植民地で鑄造され、流通する銀貨は *plata nacional*、本国で鑄造され、本国で流通する銀貨は *plata provincial* である。<sup>(19)</sup>

国内部門では低い価値の硬貨が小規模取引のために鑄造された。少額の銀レアルが一七〇六年と一七〇七年にフェリペ五世によって大量に鑄造された。この銀貨は一六七四年からカタルーニャにおいて鑄造され、また一七〇七年からオーストリアのカール大公によって鑄造され、アラゴン地方に流通したペセタと同じ価値をもった。フェリペ五世の銀貨は五・〇六六グラム、カール大公の銀貨は五・〇九六グラムの銀を含んだ。一方バロセロナ市では五・一グラムの銀貨をつくった。これらは将来ペセタとしてスペインの通貨を統一しようという展望をもっていた。スペインの通貨は国内向け通貨 *provincial* と国際通貨 *nacional* を区別することによって、国内通貨としての統一をはかろうとするものであった。<sup>(20)</sup>

一八世紀初めはスペインにとって安定と回復の時期であったといえる。一七三七年以前に金銀比価が一対一五・〇六に戻ったという微調整は別として、メキシコの銀は再び生産を増加してカデイスに流れ、一八世紀の経済成長が本格的に始まった。<sup>(21)</sup>

スペインが一六八六年から実施した二重本位制度はすでにオランダが実施していた。オランダは一七世紀に商業と海運業をもって世界に乗り出したが、その生産性の高い織物業、商業、保険、海運などのサービス業は対価としてより多くの金、銀を取得した。その過程で貨幣を鑄造したが、それは国際決済に利用される貿易貨幣であり、国際的に流通する価値のある通貨であった。同時に国内流通のための貨幣を別個に鑄造していた。オランダはこの種の二重の本位制度を設けた先駆者であった。国内流通用の貨幣は名目額よりも少ない金属を含んだ。それによってこの貨幣を



輸出に向けようというインセンティブを生じさせないためであった。他方、外国貿易には高い品位の貨幣を用いた。それは実質的な国際的商品貨幣であった。<sup>(22)</sup>

一七世紀の末(最後の二〇年間)にオランダでは異常に大きな量の貨幣を鑄造した。これは世界中で貿易用貨幣として求められ、対外的に大きな成功を収めた。<sup>(23)</sup>

当時スペインの植民地で鑄造されるピアストラ銀貨は依然として權威をもっていた。それは銀容量に変化がなかったからである。スペイン本国で鑄造される銀貨はすでに容量を減じていたので、ヨーロッパでの決済には用いられなくなった。かわって一七世紀末にはオランダの通貨がヨーロッパ周辺での主要国際決済通貨となったのである。<sup>(24)</sup>

#### 四、メキシコ・ドル

スペイン本国において一六八六年に銀貨の容量を二〇%引き下げ、国際決済におけるスペイン銀貨の地位を低下させたときにも、植民地で鑄造された銀貨については変化がなかった。以後の国際決済におけるスペイン銀貨の地位は植民地において鑄造された銀貨に依存することになった。

メキシコでのスペイン貨幣の鑄造は一五三五年の法律により決定され、一五三七年に始まり、独立戦争(一八一〇―一八二一年)まで続いた。その鑄貨はスペインおよびインドの国王の權威のもとに鑄造されたことを明示しており、独立国のメキシコ共和国が発行するペソとは明らかに異なるものである。しかし銀含有量には時に変化があったものの国際決済通貨としての連続性を妨げるほどのものではなく、スペイン国王の權威のもとにメキシコで鑄造されたペソ(スペイン・ドルまたは旧メキシコ・ドルとも呼ばれる)と独立したメキシコ共和国が鑄造したペソ(新メキシコ・ドルともいわれる)との別はあったにしても、ほぼ等しい評価を受けていた。<sup>(25)</sup>

メキシコで鑄造されたドルは一五三七—一九〇三年間に三五億四、八〇〇万ドルにのぼり、メキシコの輸入額の過半を占めたとされる。<sup>(26)</sup> スペイン・ドルの鑄造は合計五〇億ドル以上にのぼるといわれる。そのうち三五億ドルを鑄造したメキシコの地位は圧倒的に大きかった。それは南米大陸の主要銀産地であるペルー、ボリビアなどで鑄造技術が著しく劣っていたことによる。

一六五〇年にスペインにあったペルー鑄造の貨幣は再度鑄造し直すべきであるとの命令がだされ、スペインの通貨としては否定された。新しく鑄造し直した貨幣はハーキュレスの柱と plus ultra (なおもその上に) の文字を刻み、スペインの通貨として用いられたが、その製造は後再び劣悪化した。スペイン本国で一六世紀後半に採用された機械による貨幣製造法は植民地では用いられなかったので、貨幣の出来具合は悪く、銀貨の品位保持が最大の関心事であった。植民地の造幣所に機械が導入されるのはフェリーペ五世の時代、一七二八年であった。<sup>(27)</sup>

その後スペイン領植民地で鑄造される貨幣の改革は一七二八年に実施された。一レアル銀貨は三・三八三グラムとなり、一ペソ銀貨は二七・〇六四グラム、四一七・六五グレインとされた。銀の純分は古い銀貨の千分の九三〇・五に比べて幾分低下し、九一六・七になった。次の変更は一七七二年であって、一ペソは二七・〇七三グラム(四一七・七五グレイン)、純分は千分の九〇二・七であった。<sup>(28)</sup>

スペイン本国においては一六八六年以降銀貨の質の低下が屢々おきていたが、植民地における銀貨の容量引下げは以上の二回にとどまり、メキシコ・ドルへと引き継がれた。この間の銀容量の低下は五・九%に過ぎなかった。<sup>(29)</sup>

メキシコで一七三三年に鑄造されたハレアル銀貨は「二つの世界」 dos mundos と呼ばれ、世界的に有名になった。<sup>(30)</sup> メキシコは一八二一年に独立してスペインの支配を脱し、一八二三年の布告で貨幣の紋様を変えたが、通貨単位としてはペソを採用し、スペイン領時代のペソと対比して銀容量は変わらず、国際決済通貨としての価値の安定性を維持

した。

メキシコが独立した後最初の鑄造は一八四二年であつた。貨幣鑄造技術の未熟から必ずしも銀容量は一定していなかった。一ペソ銀貨の重量は、現実には多少の増減がみられ、一八六二年に平均して四一六・六四グレイン、品位千分の九〇二・五の水準にあつた。<sup>(31)</sup>

スペイン・ドルは一六世紀中葉スペイン商人により中国にもたらされた。一七世紀半ばにはオランダの東印度会社所属の船が福州、厦門、台湾、広東に立ち寄り、茶、生糸、陶磁器、絹織物、大黄などの中国産品を買い付け、その代金をスペイン・ドルで支払つた。ナポレオン戦争当時中国の輸出の四分の三はスペイン・ドルで支払われた。<sup>(32)</sup>

一九世紀初めには米国人も広東にきて通商を開始した。中国からの輸出の多くは茶であつたが、代金はメキシコ・ドルをもって支払われた。次いで米国は日本に渡航し、鎖国を解き、開国することを要求したが、その時にメキシコ・ドルが決済手段として日本にもたらされ、日本の通貨との交換比率が問題になった。次いで明治新政府によってわが国に新通貨が制定されるとき、モデルになったのがメキシコ・ドルであつた。

特に通貨制度が未整備であつた中国では、メキシコの独立後、一八五四年（咸豊四年）頃に初めてメキシコ・ドルが輸入され、それから二一〇年を経てほとんど全土にメキシコ・ドルが流通した。一時は中国でもっとも広く流通し、最も大きな勢力をもつ通貨になった。中国において新メキシコ・ドルがスペイン・ドル（旧メキシコ・ドル）から完全に転換するのは一八五四―六年ごろといわれ、メキシコで鑄造されたメキシコの銀貨が、当初若干の割引を受けたにしても、中国市場で安定性を維持して流通したことを示している。<sup>(33)</sup>

中国自身でも後メキシコ・ドルを模倣した銀貨を鑄造するようになった。メキシコ・ドル自体は一九〇〇年頃から多量の不正貨が輸入されて信用を失い、次第にメキシコ・ドルを模倣して中国で鑄造されたいわゆる新幣にとってか

わられた。

一九世紀まで多くの英領植民地ではスペイン・ドルが、極東ではメキシコ・ドルが好んで用いられた。メキシコ・ドルの価値は一八二四年の独立後若干の動揺はあったが、次第にスペイン・ドルを上回るようになった。メキシコ・ドルが広く流通するに伴って極東でドルといえば、それはメキシコ・ドルを意味した。特に中国においてそうであった。<sup>(34)</sup>

メキシコはマキシミリヤン皇帝時代（一八六四—六七年）にも植民地時代から続く銀容量をもつ一ペソ銀貨を鑄造していた。二〇世紀初頭の内乱と革命を通じて通貨体系は混乱したが、一九一九年には一米国ドル金貨につき二メキシコ・ドル金貨と宣言され、法貨とされた。当時メキシコは世界の銀生産の約四〇％を占め、依然として銀の主要生産国であった。

## 五、北アメリカ英領植民地の通貨

北アメリカへの移民にはイギリス人が多かったので、当然のことながら計算貨幣はイギリス本国のポンド、シリング、ペンスが用いられた。しかし英領植民地に流通したイギリスの貨幣は住民の需要を満たすには少なかったため、植民地にも造幣所の設置が考えられた。それにもかかわらず一六六八年に本国の命令により造幣局は閉鎖された。アメリカの英領植民地においては金銀が発見されなかったため、スペイン領植民地の場合とは異なり、余剰の金銀をもって貨幣を鑄造するという動機は生じなかった。<sup>(35)</sup>

その結果英領植民地においては外国貨幣をもって鑄貨の不足を補わざるをえなくなった。当時英領植民地に流通した外国貨幣は、フランスのグニー guinea 金貨、ピストール pistole 金貨、ポルトガルのモイドー moidore 金貨、ヨハ

ネス Johannes 金貨、スペインのダウブローン doubloon 金貨、ピストール pistore 金貨、イギリスのギニー guinea 金貨などであり、銀貨ではフランスのリーヴル livre、クラウン crown、イギリスのクラウン crown、スペインのドルであった。このうち最も多かったのはスペイン・ドルであった。それは主として西インド諸島を経て流入した<sup>(36)</sup>。

一七世紀にスペイン・ドルの純銀量は平均して三八八グレインであって、ほぼイギリスの正貨四・五シリングに等しかった。しかし一七三八年には三八二・八五グレインに減少した。鑄造技術が低かったので、スペイン・ドルの純度、重量は一定しなかったといわれる。それにもかかわらず、ペソで表示した額のスペイン・ドルは個数で数えて受け取られたということからみて、剪取が行われていたとしてもその質はほぼ一定していたものと推定される<sup>(37)</sup>。

米国の独立戦争が始まったとき、一七七五年四月一九日、レキシントンで戦火があがったが、この年の五月一〇日、第二回の大陸会議が開かれ、戦費調達のため二〇〇万スペイン・ドルの信用手形 bills of credits を発行することにした。この信用手形は「コンチネンタル」という名称を与えられ、期限を明記しないが、将来スペイン・ドルで償還すると宣言した<sup>(38)</sup>。これが独立後独自の貨幣ドル（スペイン・ドルをモデルにした）をもつに至る経緯である。

米国が独立したとき、その貨幣制度を決定する過程で、ジェファークソンは一七八六年に通貨単位としてスペイン・ドルを提唱した。このとき一ドルは金二四・六二六八グレイン、銀三七五・六四グレインとされ、金銀比価は一對一五・二五三という比率であった。しかしこれは単なる発表にとどまった<sup>(39)</sup>。

実効のある貨幣制度の発表は財務長官ハミルトンによる一七九二年の貨幣法（Coinage Act of 1792）の制定である。貨幣単位はドルとし、その価値は金銀両金属により決定されたので、複本位制になった。ハミルトンは財務省でスペイン・ドルを任意抽出して計量させ、その平均純銀含有量は三七一・一四グレインであることを明らかにし、これをドルとした。すなわちハミルトンは当時流通していたスペイン・ドル（純銀含有量三七二グレイン）を米国の貨幣単位

(実際は三七一 $\frac{1}{4}$ グレイン)として選んだのである。ちなみにドルの純金含有量は二四 $\frac{3}{4}$ グレインとされた。金銀比価は一对一五を基準とした。<sup>(40)</sup>

## 六、中国におけるペソの流通

中国における銀貨の使用は金、元から明の時代にかけて著しく増加し、清代に一層盛んになった。清の時代に政府の収入、支出は主として銀を用い、乾隆一〇年(一七四五年)には民間でも小口の取引を除き銀を用いるようになった。しかし銀による決済は国家が一定の重量、品位、形式を定めて銀貨を鑄造したのではなく、地金のまま重量、品位を検査して使用した。<sup>(41)</sup>従って銀両とは秤量貨幣であった。

従ってスペインを始め外国の銀貨の輸入が増加するに伴い、これを使用するものが多くなり、さらに国内で外国銀貨を鑄造するようになって鑄造銀貨の使用が次第に増加した。清朝時代に政府は純銀一両(庫平—中央政府が用いたはかり)は五七五・八一グレインと定めた。しかし外国銀貨(洋銀と呼ぶ)の輸入が多くなると、洋銀の形状は精巧で、取扱いにも便利であったので、中国人はこれを歓迎し、国内では洋銀を模倣した鑄造が始まった。道光一八年(一八三八)年にはスペイン・ドルを模倣した銀貨を鑄造し、単位を一元とした。<sup>(42)</sup>スペイン・ドルとはいったが、実際にはスペインの植民地であるメキシコで鑄造されたスペインの銀貨であった。

光緒三十一年(一八八七年)には中央政府が一両銀貨を本位貨とし、幣制を統一する動きをみせたが、それが実施されないうちに宣統二年(一九一〇年)幣制則例が發布され、一圓銀貨(庫平七錢二分、品位百分の九〇)をもって本位貨とすることになった。<sup>(43)</sup>

清代における銀貨の鑄造は乾隆五十七年(一七九二年)チベットを征服したときラサに宝蔵局を設け、宝蔵銀錢を鑄造



したのに始まる。その後光緒末年に成都造幣分廠においてインドのルピーにならって三錢二分の銀元（以後圓にかえて元を用いる）を鑄造した。しかしこれらの銀貨はチベットおよび西康地方で使用されただけでその他の地方には流通しなかった。一八三八年には福建省において七錢二分（ $23.33$ グラム）の銀元を発行した。これはスペイン・ドルにならったもので、台湾において鑄造された。しかしその製造はきわめて粗雑であつた上に重量を減じ、一八四五年には百分の五少なくなった。<sup>(44)</sup>

光緒の初期には外国銀元特にメキシコ・ドルの流入が盛んになり、中国南北の通商港には勿論、内陸にも流通したので、光緒一六年（一八九〇年）広東においても銀元を鑄造した。これは同地の總督が鑄造を奏請したもので、政府機関が龍洋（外国から渡来した貨幣）を鑄造した最初の事例である。この銀元は一個の重量を庫平七錢三分（ $26.28$ グラム）とし、メキシコ・ドルと同様に流通した。この銀元は一面に満・漢両文をもって「光緒元宝」の四字を彫つてある。<sup>(45)</sup>

ここにおいて湖北、江蘇、福建、直隸、吉林などの各省でも広東にならって銀元を鑄造した。しかし画一的な制度ではなかったので、各省の銀元の形式、重量はそれぞれ異なっており、流通地域も各省内に限られた。このため光緒二七年（一九〇一年）に銀元の鑄造、流通についての準則を定め、一個の重量は庫平七錢二分とし、補助貨として小額の銀元を鑄造した。なお形式を統一するため、広東、湖北の両省において鑄造することになったが、その後他の各省においても銀元を鑄造し始めた。<sup>(46)</sup> 宣統二年（一九一六年）五月には重量七錢二分の一元銀貨をもって本位貨とするという通貨制度が採用された。

中華民国になってからも、国幣条例によって重量は庫平七錢二分、品位百分の九〇、銀含有量六錢四分八厘の一元銀貨を三年一二月より天津で鑄造した。しかもこの際品位百分の九〇を八九に改めた。南京および杭州造幣所においてもこの銀貨が鑄造され、一七年三月までに六、〇〇〇萬元を鑄造した。<sup>(47)</sup>

メキシコ・ドルは外国銀元として最も広く流通した貨幣であつて、墨銀、鷹洋、<sup>インヤン</sup>英洋などと呼ばれた。スペイン・ドルは本洋、英洋、鷹洋、香港ドルは站人洋、杖洋、日本円銀は日本龍洋と呼ばれた。

中国全土での龍洋の鑄造額は民国三年、財政府の調査によれば二億六〇二万八、一五三元とされ、七年には二億三、五三九万八、〇五〇元、八年には一億八、六三五万一、四一九元とされる。<sup>(48)</sup>しかし鑄造額については正確な資料がなく、中国政府にもわかっていないと思われる。エドワード・カーンは一九二九年までの新幣の鑄造額を約一一億元と推定している。<sup>(49)</sup>

以上にみるように中国ではペソの現物が国内に流通したのみならず、ペソを模倣した銀元が鑄造され、内外の決済に利用されていた。中国の広い国土からみても中国でのペソの流通はきわめて大きなものであつたと思われ、中国の貨幣制度に及ぼしたペソの影響は甚大であつたとみられよう。

## 七、日本への流入と貿易銀

メキシコ・ドルが日本で決済通貨として用いられるようになったのは、米国のペリー提督来航に伴い、安政元年（一八五四年）一二月、下田における日米和親条約によつて下田、箱館の二港において米国人が食料、燃料等を買入れれる場合、日本側役人を通じて外国銀貨を用いることが承認されてからである。<sup>(50)</sup>

日本ではメキシコ・ドルを一般に洋銀と呼んだ。また墨銀、ドル銀、ドルラルとも称された。その結果メキシコ・ドルと当時の日本の通貨との交換レートについて度重なる交渉が行われ、日本側はかなり不利な取引があつたことが記録に残されている。<sup>(51)</sup>

明治新政府が生まれたとき、その幣制改革では先ずメキシコ・ドルと対等に取り引される銀貨を本位貨幣とし、国際



的貨幣にしようという希望があったようである。このため明治二年（一八六九年）、新貨幣の発行について東洋銀行（Oriental Bank Corporation）の支配人ロベルトソン（J. Robertson）に諮問した。ロベルトソンの原案は、本位貨幣は銀貨とし、メキシコ・ドルをもって素材価値の標準とするというものであった。本位は一円が四一六グレイン、一〇分の九の品位である。

同時に一八六九年七月七日、外国在日公使に新貨幣の鑄造を告げる文書を送り、それに添付して「一円ヲ以テメキシコ洋銀一枚に比較シ起算スル所ノ者ナリ」という事情を伝えていた。<sup>(52)</sup>

しかし幣制改革では最終的に金本位と決定された。このため当初銀本位を予想して本位貨として鑄造した一円銀貨は廃止になった。しかし当分貿易上の便宜をはかり、開港場における通商上の取引ならびに外国人の納税等にかぎり使用できる貿易銀貨という名目で一円銀貨を活用し、メキシコ・ドルと並んで通用させることとした。

このため明治四年五月一〇日の新貨条例により金貨を本位貨幣とし、純金一・五グラムを一円と定めた。貿易通貨としての一円銀貨は開港場以外では公納、その他一般に通用できないが、私の取引では相互に承諾のうえで受払いする分には全国で無制限通用が可能になった。<sup>(53)</sup>

新貨条例は基本としては金単本位制であるが、開港場においては金銀複本位制が行われ、かつ全国的にも金銀複本位制が実施される可能性を含むものであった。従って新幣制は金本位制とはいっても実質的には金銀複本位制に近いといえるものであった。<sup>(54)</sup>

新貨条例による貿易一円銀貨はメキシコ・ドルと同一であることを目指したが、実際に鑄貨の規範となったものは香港ドルであって、量目四一六グレイン（二六・九五七グラム）、銀純度一〇分の九であった。しかしアジア諸地域において日本の貿易銀はメキシコ・ドル並みに流通せず、貿易上に支障を生じたので、その対策として銀量を増加した。

すなわち明治八年二月二八日太政官布告第三五号をもって貿易一円銀貨の量目を四グレイン増加するとともに銀貨表面および裏面の刻印を改めた。<sup>(55)</sup>

新貿易銀の量目は米国の貿易ドルを規範として、これと同等に定めたため、メキシコ・ドルよりやや重かった。従って新貿易銀はメキシコ・ドルより銀量が多かったのであるが、市場価格はかえってメキシコ・ドルの方が高かった。これはその貨幣を発行する国家の幣制に対する社会的信認の相違によるものであって、日本の貿易銀貨の素材価値を高めるだけで解決する問題ではなかった。結局新貿易銀は発行しても溶解されて流通せず、一部のものを利するにとどまったので、政府は新貿易銀の鑄造をやめて明治十一年一月二六日旧貿易銀を再鑄発行した。<sup>(56)</sup>

このケースからも明らかのように通貨の流通は貨幣の量目のみではなく、通貨発行の主体に対する人々の信認がどの程度のものかによることを示したものととして注目される。メキシコ・ドルが広く国際決済通貨として流通した背景を示すものとして貴重な実験であった。

## 八、香港におけるメキシコ・ドル

香港は巨大な中国大陆に隣接しているので、中国の影響力がきわめて大きいことはいうまでもない。貨幣の分野でも銀に執着する中国の伝統は無視しえないものであった。その結果香港は否応なく中国通貨地域の影響を色濃く受けることになった。

香港における銀貨の流通はイギリス人が到来するよりかなり以前からであった。一五七五年に中国人とスペイン人との貿易が始まってからスペインのハレアル銀貨は厦門、広東、寧波など各地の中国の港に流入した。フィリッピンを植民地とすることによってスペイン人の根拠地はマニラにおかれた。フィリッピンとの貿易を通じて、スペイン人

は中国の絹を輸入し、その代金を新大陸に大量に生産された銀で支払った。

一八四二年にイギリスは中国から香港を奪った後、三月二九日に布告を出し、スペイン、メキシコおよびその他の国のドル銀貨、東インド会社のルピー、中国の銅銭を香港での法貨と定めた。しかし一八四二年四月二七日には別の布告が出され、メキシコおよび他の中南米諸国のドル銀貨を香港における本位貨幣とした。イギリスはその植民地でイギリス本国の貨幣を鑄造することには北アメリカ植民地の場合と同様に疑念をいだいており、香港だけを例外とすることはできなかった。このため一八四四年一月二八日の新布告は、以前に出された布告を撤回し、イギリスの銀貨とともに東インド会社が発行する金貨（一八三五年九月一日から鑄造された）、スペイン、メキシコおよびその他の中南米諸国が発行するドル銀貨を本位貨幣とした。

しかし中国人は銀決済の慣習に固執していたので、ドル銀貨を唯一の本位貨幣として認めていた。一般商業社会も植民地政府が発する布告は紙切れとしか考えなかった。植民地政府を別として民間の勘定はドル建てで行われており、ポンドではなかった。加うるに裁判所において、契約がドルでなされているとき、支払いは同じ貨幣によってなされるべきもの、との判決があつて、植民地の通貨政策に衝撃を与えた。このような経過をたどってメキシコ・ドルは中国人の好みに合い、事実上香港において本位貨幣となった。

一八六三年一月九日に新しい布告が発せられ、メキシコ・ドルあるいは他の等価のドル銀貨を唯一の無制限法貨とした。それに伴ってイギリスは一八六四年にブリティッシュ・ドル *british dollar* を鑄造して東アジアでのイギリスの通貨勢力を回復しようとした。このためイギリスは四一六グレイン、純度千分の九〇〇のブリティッシュ・ドルの鑄造を開始した。しかしブリティッシュ・ドルは中国人の好みに合わず、一%以上のプレミアムをつけて交換された。<sup>(57)</sup>

イギリス人が香港にもたらしたイギリスの銀貨あるいはブリティッシュ・ドルについて吉田虎雄は銀貨の純分が低

かったため中国人に歓迎されなかった、と述べている。一八六六年に鑄造されたブリティッシュ・ドルも銀含有量がメキシコ・ドルに比べて三グレイン低かったというが、<sup>(58)</sup>真相は明らかでない。

新しく鑄造されたブリティッシュ・ドルに対する中国人の態度をみてイギリス植民地当局は自身の貨幣鑄造計画を放棄し、鑄造機械を解体してしまった。解体した機械はたまたま明治維新政府のもとで新貨幣を鑄造し始めた日本に売却された。<sup>(59)</sup>一八六四年からのブリティッシュ・ドルの鑄造額は二一〇万八、〇五四ドルにとどまった。<sup>(60)</sup>

一八八三年にブリティッシュ・ドルはボンベイとカルカッタの造幣所で鑄造され、シンガポールおよびマレー半島に流通し、香港に持ち込まれたが、一八九五年になって中国人の関心をも集めるようになったという。<sup>(61)</sup>これらのドルは重量四一六グレイン、純度千分の九〇〇とかつてのブリティッシュ・ドルと同じとされたが、吉田虎雄によれば、品位がかつて香港で鑄造されたものより高かったので、香港ドルともいわれるブリティッシュ・ドルは中国の南部および北部にも流通し、メキシコ・ドルに次ぐ勢力を保ったとされる。しかし、中国革命後に中国の貨幣制度が整うに従って駆逐され、その流通量は減少した。<sup>(62)</sup>

## 九、海峡植民地のメキシコ・ドル

マレー半島およびシンガポール（海峡植民地 Straits Settlements と呼ばれる）においては、一八九九年まで通貨単位はメキシコ・ドルであった。

一八一九年ラッフルズ Thomas Stamford Raffles は、イギリスの東印度会社がマレー半島に貿易拠点を設置するためマレー地方の首長と交渉し、トンク・ロング Tengku Long に、五、〇〇〇スペイン・ドルの年金を支払うとともにイギリスが保護を与えることを約束しており、<sup>(63)</sup>当時すでにメキシコ・ドルが通貨として用いられていたことを示し

ている。

一八九九年五月、海峡植民地政府は初めて紙幣を発行した。この紙幣は、本位貨幣のメキシコ・ドルのほか香港上海銀行、インド・オーストラリア・アンド・チャイナ・チャータード銀行の銀行券と並んで商取引に用いられた。しかし一九〇三年、金為替本位制度採用の方針を決定し、同年六月海峡植民地貨幣法を公布し、海峡ドルを発行した。この銀貨はインド造幣所で製造され、海峡植民地に輸送された。それに伴ってイギリス銀貨およびメキシコ・ドルの輸入は禁止され、新通貨をもって無制限の法貨とした。新しい海峡植民地ドルは重量四一六グレイン、単位千分の九〇〇であって、メキシコ・ドルと同等の価値をもった。

### 一〇、アジアにおけるスペインの拠点・マニラ

フィリッピンは一五二一年マゼランの来航後スペインの植民地となった。古い時代には金製の装飾品が、後には円錐形をした金塊が貨幣として用いられていた。植民地時代にメキシコのアプルコとの間にガレオン船による貿易が始まり、一五六五年から一八一五年に至る二五〇年間続いた。この時代にも種々の独特な硬貨が用いられたが、それは不規則かつ粗雑な造りであった。一八世紀にスペインの銀貨ペソが導入された。

ガレオン貿易による新大陸との決済は大部分ペソで行われ、マニラからはもっぱら中国産の絹を輸出した。

スペイン本国政府はフィリッピンに造幣所は造らなかつたので、中南米諸国で製造されたペソ銀貨がフィリッピンに送られた。スペイン領植民地時代に造幣所が造られるのは一八五七年イサベラ二世の時代であり、一八六一年三月一九日に製造を開始した。

中国産の絹はマニラからメキシコへの輸出の大部分を占めた。一五九六年一〇月、土佐の浦戸に台風を避けたガレ

オン船、サン・フェリペ号の積荷からみて、生糸、絹織物のシェアは五九%にのぼった。絹に次いで金塊のシェアが高く、二四・四%を占めた。これは一六世紀末の金銀比価がヨーロッパでは一對一二であったのに対し、中国では一對七と金価値が低く評価されていたので、マニラからメキシコに輸送するだけで金価値は七〇%以上も高くなるからである<sup>(64)</sup>。

他方ガレオン船によるアジアへの銀搬出額は明確でない。当時、東方との貿易決済のために西ヨーロッパが支払った銀は、一六世紀初めに年平均二〇・五トンであったものが、同世紀末には六四・三トンに増加したとされており、ヨーロッパが同世紀末に生産した銀量は辛うじて二〇トンであったことを考えれば、ヌエバ・エスパーニャからマニラに向かった銀量はこれらの数字に匹敵する量であったのではないかと推定される。

この巨額の銀はペソの形をとって中国を始めとする周辺の東アジア諸地域に入り、スペイン・ドルあるいはメキシコ・ドルに対する強い信託を築きあげるのに寄与した。

## 一一、貿易銀

貿易銀とは外国貿易の決済に使用する目的をもって鑄造された銀貨である。一七五〇年から一九四〇年にかけて多くの国、特にヨーロッパの経済大国と貿易商人はアフリカ、アラブ諸国、インド、東南アジア、極東の国々との貿易の便宜をはかるため、貿易用の硬貨を鑄造した。この種の硬貨は一般に貨幣面に示された額面価値よりはむしろ含有される金あるいは銀の重量と純分に基づく価値で評価された。先に日本で鑄造された貿易銀について述べたが、スペインのハリアル銀貨は最も典型的な貿易銀であって、これをモデルにして各種の貿易銀がつくられた。イギリスの貿易銀、米国の貿易銀を始め、印度支那ドル (Saigon Dollar)、ロシア貿易銀など多種にのぼった。



このほかにも貿易貨幣としてオーストリア、ハンガリー、オランダのデュカット金貨、オーストリアのマリア・テレサ・ターレル、その他アフリカおよび中東で成功した各種の金銀貨をあげることができる。

イギリスの貿易ドル (British Dollar) については香港の項で述べた。

米国の貿易銀は、一八七三年に鑄造され、もっぱら東洋諸地域の需要に応ずるために発行された。重量四二〇グレイン、品位千分の九〇〇であって、メキシコ・ドルに比べて純銀量が多かったので中国人に歓迎された。しかし銀量が多いので鑄つぶされるものも多かった。その後銀価が暴騰したため鑄造は停止された。<sup>(66)</sup>

インドシナで初めて銀貨を鑄造したのは一八八五年であって、メキシコ・ドルおよび米国貿易銀の利用を抑えることを目的に造られた。このため重量四二〇グレイン、品位千分の九〇〇とした。しかしその純銀量がメキシコ・ドルより大きかったので鑄つぶされ、あるいは退蔵されて市場に出てこなかった。このためインドシナ政府は一八九五年に重量を四一六 $\frac{1}{3}$ グレイン、品位千分の九〇〇の新銀貨を鑄造したので、この貿易銀の流通は円滑になり、中国南部にも流通したが、その勢力は微々たるものであった。<sup>(67)</sup>

## 結 び

以上に一五世紀からスペインが鑄造したハレアル銀貨が国際決済通貨として広く世界に流通した経過を明らかにした。最初は本国で鑄造され、主としてヨーロッパでの決済に用いられた。次いで新大陸に豊富な銀を産出し始めると、アメリカの植民地でも鑄造されるようになり、しかも英領北アメリカの植民地に流れ、さらにアジア地域にも流通し、米国並びに東アジア諸国の通貨制度に大きな影響を及ぼした。しかし一七世紀後半からスペイン本国鑄造の銀貨の量は引き下げられ、国際決済通貨としての地位を失ったが、メキシコなど植民地で鑄造された銀貨が北アメリカおよ

び東アジア諸国において通貨制度の創設および整備に重要な役割を果たした。

メキシコ経済はいわゆる発展途上国であって、その経済発展段階はきわめて低い水準にあり、金融制度も整備されていたわけではない。その資本形成には外国資本が大きな役割を果たしていた。それにもかかわらずイギリスの通貨ポンドが国際決済に重要な役割を果たした時代に先立って、メキシコ・ドルと呼ばれたメキシコ鑄造の銀貨が南北アメリカおよび東アジアにおいて国際決済手段として広く用いられた理由はどこにあったのであろうか。<sup>(68)</sup>

この問題に対する答の第一は、スペインが新大陸を発見、征服し、当時の世界で第一の植民地帝国となった歴史的事実を反映し、その通貨を国際的決済通貨に押し上げたことである。そのイメージは一七世紀にスペイン帝国が衰退し始めた後も世界に印象づけられ、豊富な銀の産出に支えられてペソを特に東アジア地域に流通させた。一七世紀後半から一八世紀初めにかけてスペイン本国のヨーロッパにおける地位が低下し、オランダがヨーロッパにおける経済大国として登場し始めると、本国にかわって植民地特にメキシコがスペインの銀貨を大量に鑄造し、ペソは国際決済手段としての地位を保持し続けた。なかでも一七三二年にメキシコで鑄造されたスペインおよびインド国王が発行したハレアルの銀貨、ドス・ムンドス *dos mundos* は広く世界にもてはやされていた。銀の純分はメキシコ鑄造分でも若干落ちてはいたが、植民地で鑄造されたスペインの銀貨ペソの価値に大きな変化はなかった。

メキシコ独立後に鑄造された貨幣はスペインの通貨をそのまま受け継ぎ、ハレアル銀貨を鑄造、発行した。メキシコ共和国が発行したハレアル銀貨は当初多少低く評価されたようであるが、スペインの銀貨ペソと同様アメリカおよびアジアに広く流通し、国際決済通貨としての役割を演じ続けた。これは衰えたとはいえ大植民地帝国スペインの威光に支えられたものであり、充実した銀容量がその評価を変えることなく維持したものといえよう。

しかしメキシコで鑄造されたペソの流通過程をみると、アジア諸地域でのペソに対する信認は必ずしも銀容量に支



配されていたわけではない。時に銀容量がより多い銀貨が発行されてもペソの方が民衆の信認をえて流通したのである。通貨に対する民衆の信認はきわめて微妙なものであることを認めざるをえない。

ペソが国際決済通貨として高く評価された第二の理由はペソの銀純分が充実しており、その品位が長期間安定していたからにはかならない。これは新大陸のスペイン領植民地に豊富な銀を産出したことに理由がある。メキシコを含むスペイン領アメリカの銀生産は一四九三年から一八五〇年に至る間世界産銀の八〇%を占めたといわれる。

しかし鑄造する側で一定した純分を保持させようという意志の存在が不可欠である。スペイン本国では諸王国が統合される過程で、カステイリヤ王国で一五世紀に発行された銀貨の純分が守られず、ヨーロッパでの国際決済通貨としての地位を失い、かえって植民地で鑄造された銀貨が国際的信認をえた過程からも明らかである。しかもポトシの銀山の産銀量は当時きわめて大きなものであったにもかかわらず、ポトシの造幣所で鑄造された銀貨が粗悪であったことから国際通貨としての信賴を失い、国際決済通貨として評価されることはなかった。

メキシコで鑄造されたペソのみはこの点で高い評価をえており、およそ四〇〇年の間に銀容量の低下は僅か五・九%に過ぎなかったとされる。一九世紀初頭の独立後もハレアル銀貨の純分は維持されており、流通過程での磨損はことうむったにしても、その金額をペソ貨の数で数えることを可能にしたほどである。

第三に、当時東アジア諸地域の貨幣制度は未整備であり、多くの国が物々交換の時代から幾分成長した商品貨幣あるいは秤量貨幣を用いた時代であった。しかもアジアでは民衆が資産として銀を愛好する傾向が強かった。インドで一八五三年に成立した英領インド貨幣法は銀本位制を採用した。<sup>(69)</sup> 中国においても、明の時代に貨幣としての銀の使用はかなり増加し、清朝時代に一層盛んになった。政府の収入支出には主として銀を用い、乾隆一〇年（一七四五年）には民間においても小口の取引を除いてすべて銀を使用させた。しかも中国の貨幣は国家が一定の重量、品位および形

式を定めて貨幣を鑄造したのではなく、地金のままその重量、品位を検査して使用させた。銀はいわゆる秤量貨幣として通用した。

その結果、量目が比較的安定していたスペインあるいはメキシコの銀貨は民衆に受け入れられ易い貨幣となりうる可能性をもっていた。しかも東アジアではスペインあるいはメキシコのペソ以外に国際決済に利用できる手段が存在しなかったことからペソは交換手段として広く用いられるようになった。特に中国の場合、国内貨幣として容易に使用する貨幣自体が存在しなかったことから、ペソは中国国内でも交換手段として広く利用されるようになった。

また中国に代表されるように東アジア諸地域は生産力が低く、市場は狭く、社会的分業は未発達であったので、金に比べて価値が低い銀貨であるペソの利用は当時の経済状況からみても適切であったといえよう。

以上の環境がペソへの関心を大きくし、東アジア諸地域においてメキシコ・ドルはそれが本来有する地金価値以上に評価される傾向をみせた。日本で貿易銀の量目をメキシコ・ドル以上に引き上げたにもかかわらず一般的流通をみるに至らず、香港においても同様の現象が起きていることはこの間の事情を極めて明白に物語っていた。

なお金銀比価がヨーロッパとアジアとは異なり、アジアでは金の価値が相対的に低く、銀の価値が高かったので、銀をアジアに向かわせる傾向があったことが屢々指摘される。一六世紀末に金銀比価はヨーロッパでは一対一二であったが、一八世紀には一四ないし一五に変わり、中国および日本では一対七であったものが九ないし一〇に変わった。これは銀がヨーロッパからアジアに流れる傾向があったことを示すものである。しかしそれはペソ銀貨がアジアに向かう動機の一つではあったが、ペソ銀貨が広くアジアで決済通貨として使用されるようになった理由とは別個の問題である。

以上の理由からスペインで鑄造されたハレアル銀貨とその銀容量を受け継いだメキシコ鑄造の銀貨が一五世紀末か

ら一九世紀末まで、イギリスのポンドが国際決済通貨として登場するまで、当初はヨーロッパにおいて、後にはアメリカおよび東アジアにおいて、国際決済通貨として大きな役割を果たしたのである。

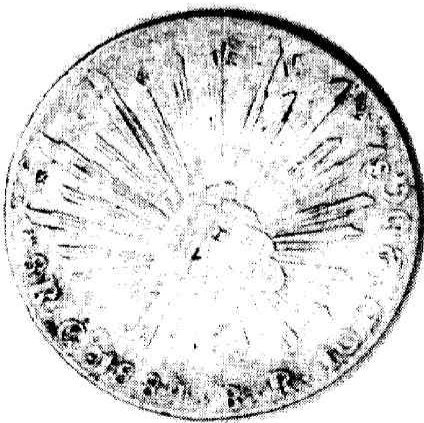
しかもペソは単純に銀容量のみによって評価されたわけではない。日本の貿易銀の銀容量を高めても必ずしも市場で流通したわけではない。世界の市場で流通するためには貨幣の発行主体を含めて民衆の通貨に対する信認が必要である。貨幣としてペソを使用しようという意志と慣習の存在が世界貨幣としての評価を決定するものであった。メキシコで鑄造されたペソ銀貨が広く世界の人々からの信認をうるに至るには長い歴史に裏打ちされなければならなかった。



8 レアル  
スペイン植民地王国（メキシコ市鑄造） 1759 年（二つの世界）



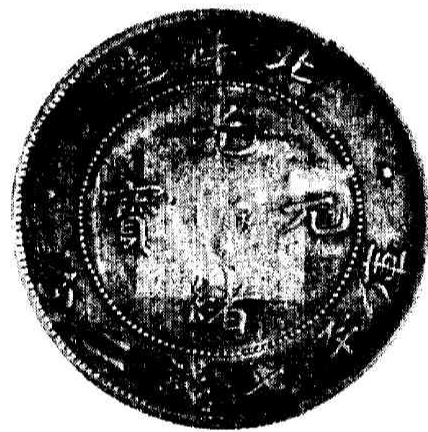
8 レアル  
スペイン植民地王国（ポトシ鑄造） 1799 年



8 レアル  
メキシコ共和国 1884 年



1 円 貿易銀  
日本 明治 8 年



1 円 光緒元宝  
中国（清朝時代） 1904 年（光緒 30 年）以後



1 円  
中国（中華民國） 袁世凱像 中華民國 3 年（1914 年）



1ドル  
米国 1882年



1ドル=1円 貿易銀  
イギリス

(実物大)

## 注

- (1) Arthur Nussbaum, *A History of the Dollar*, Columbia University Press, New York, 1957, 邦訳、浜崎敬治訳、ドルの歴史、法政大学出版局、ハページ。
  - (2) *ibid.*, ハページ、注17。Michel Chevalier, *La Monnaie* (2nd ed., 1986), p. 183.
  - (3) Pierre Vilar, *Oro y Moneda en la Historia 1450-1920*, Editorial Ariel, Barcelona, 1969, p. 270.
  - (4) *ibid.*, pp. 274-7.
  - (5) 川上稔「イベリア諸国の進出——十六世紀」『岩波講座 世界歴史16』、一三五ページ。
  - (6) E. E. Rich & C. H. Wilson (ed.), *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol. IV, Cambridge, 1967, p. 446.
  - (7) Pierre Vilar, *op. cit.*, p. 415.
  - (8) *ibid.*, p. 415.
  - (9) 井上幸治「二、経済・社会政策」『岩波講座 世界歴史16』、三〇ページ。
  - (10) 久光重平「西洋貨幣序説」第68章、16世紀のイベリア半島『泰西マンスリー』、第一三卷第七号、一九八三年七月、三七ページ。
  - (11) Pierre Vilar, *op. cit.*, p. 188.
  - (12) W. G. Sumner, "The Spanish Dollar and the Colonial Schilling", *American Historical Review*, Vol. 3, No. 4, July 1898, pp. 608-9.
  - (13) Pierre Vilar, *op. cit.*, p. 138, pp. 188-9.
  - (14) Arthur Nussbaum, *op. cit.*, 邦訳、七ページ。
  - (15) *ibid.*, 邦訳、七ページ。
  - (16) Pierre Vilar, *op. cit.*, p. 337.
- 久光重平「西洋貨幣序説」第78章、17世紀のイベリア半島、スペイン『泰西マンスリー』、第一四卷第一号、三三三ページ。「四分の一切り下げ」とあるが、五分の一の誤植と思われる。これは、その後で新しいデザインのマリア貨（二二グラム）が造られたと述べ、切下げ前のハレアル貨の重量を二七・五グラムと示していることから明らかである。



- (16) Pierre Vilar, op. cit., p. 337.
- (17) 中国に流入したペソを中国人は「スペイン・ドル spanish dollar」と呼んだ。これは鑄造はメキシコの造幣所製であるが、スペイン本国の通貨であることを示したものである。後にメキシコが独立してからは「メキシコ・ドル mexican dollar」と称している。
- 吉田虎雄『支那貨幣研究』昭和八年五月三十日、東亜経済研究会、一二二—一二三ページ。本書の中国語訳は周伯棣により「中國貨幣史綱」として出版された。
- (18) Pierre Vilar, op. cit., pp. 337-8.
- (19) *ibid.*, pp. 338-9.
- (20) *ibid.*, pp. 338-9.
- (21) *ibid.*, p. 339.
- (22) *ibid.*, pp. 285-6.
- (23) 久光重平「西洋貨幣序説(75)、第81章、17世紀のネーデルランド」『泰西マンスリー』第一四卷第三号、一九八四年三月、二六ページ。
- (24) Pierre Vilar, op. cit., p. 205.
- (25) 吉田虎雄、前掲書、一二三—一四ページ。
- (26) 小野一郎「日本におけるメキシコドルの流入とその功罪(一)」『経済論叢』(京都大学)第八十一卷第三号、一九五八年、三ページ。
- (27) W. G. Sumner, op. cit., p. 611.
- 久光重平「西洋貨幣序説(77)、第68章、16世紀のイベリア半島、スペイン」『泰西マンスリー』第一三卷第七号、一九八三年七月、四〇ページ。第一四卷第一号、三四ページ。
- 小野一郎、前掲論文、八ページ。
- (28) W. G. Sumner, op. cit., pp. 615-6.
- 小野一郎、前掲論文、九ページ。
- (29) W. G. Sumner, op. cit., p. 617.



小野二郎、前掲論文、四ページ、九ページ。

(30) 「二つの世界 dos mundos」と呼ばれるもとも有名なペソ銀貨は一七三三年から一七七二年にかけてメキシコで鑄造された。新大陸の発見が行われるまでジブラルタル海峡をこえては暗黒の世界であると思われていた。従ってコロンブスの快挙はハーキュレスの柱をこえた彼方に新しい世界があることを証明したもので、ドス・ムンドスとは正にもう一つの世界、すなわち西半球を含めた世界を象徴する文様であった。さらに UTRAQUE UNUM の文字は「合わせて一つ」を意味し、スペイン帝国の世界的権力を指すものである。

この銀貨はもっぱらメキシコで鑄造され、リマ、サンチャゴ、グアテマラ、ボゴタ、ポトシでその鑄造が企てられたのは一七六七年になってからであった。

波に洗われるハーキュレスの柱の文様は一六世紀初めのハレアル銀貨に刻まれた文様であって、この種の銀貨を pillar dollar と呼んだ。

(31) 小野二郎、前掲論文、一〇ページ。

(32) 吉田虎雄、前掲書、一二三ページ。

(33) 小野二郎、前掲論文、四一九ページ。

吉田虎雄、前掲書、一二四ページ。

(34) Arthur Nussbaum, op. cit., 邦訳、五七ページ。

(35) 片山貞雄『ドルの歴史的研究——生誕より連邦準備制度まで——』ミネルヴァ書房、昭和四二年、二ページ。

(36) 浅羽良昌「アメリカ植民地に流通した外国鑄貨——スペイン・ドルを中心として——」『九州共立大学紀要』第一四卷第二号。

(37) 片山貞雄、前掲書、三ページ。

(38) Arthur Nussbaum, op. cit., 邦訳三六—三八ページ。

(39) ibid., 邦訳、四六ページ。

(40) ibid., 邦訳、五〇—五一ページ。

(41) 吉田虎雄、前掲書、八八ページ。

(42) 銀元は銀圓と書くのが正しい。元 Yuan は圓と同声で、字形が簡単なので、これを借りて用いた。

- (43) 吉田虎雄、前掲書、一一八ページ。
- (44) 前掲書、一一四—五ページ。
- (45) 前掲書、一一五—六ページ。
- (46) 前掲書、一一六—七ページ。
- (47) 前掲書、一一九—二〇ページ。
- (48) 前掲書、一一八ページ。
- (49) 前掲書、一一九—二一ページ。
- (50) 日本銀行調査局編『図録日本の貨幣7』東洋経済新報社、昭和四八年一月、一六八—七二ページ。
- (51) 小野一郎、前掲論文。
- (52) 佐藤雅美『大君の通貨——幕末「円ドル」戦争——』講談社、昭和五九年。
- (53) 日本銀行調査局編、前掲書、一六八—九ページ。
- (54) 前掲書、一七四ページ。
- (55) 前掲書、一七九ページ。
- (56) 前掲書、一九三—四ページ。
- (57) 前掲書、一九五—六ページ。
- (58) William F. Spalding, Dictionary of the Worlds Currencies and Foreign Exchanges, Sir Isaac Pitman & Sons Ltd., London, 1928, pp. 92-3.
- (59) 吉田虎雄、前掲書、一二五ページ。
- (60) 前掲書、一二五ページ。
- (61) William F. Spalding, op. cit., p. 93.
- (62) *ibid.*, pp. 93-4.
- (63) 吉田虎雄、前掲書、一二四—五ページ。
- (64) *ibid.*, p. 94.
- (65) 吉田虎雄、前掲書、一二五ページ。

- (63) Ernest C. T. Chew, "The Foundation of A British Settlement", Ernest C. T. Chew, and Edurin Lee, "A History of Singapore", Oxford U. P., Singapore, 1991, p. 36.
- (64) 木村正弘『鎖国とシルバード——世界のなかのジパング——』サイマル出版会、一九八九年、四七ページ。
- (65) Pierre Vilar, op. cit., 136-7.
- (66) 吉田虎雄、前掲書、一二五—六ページ。
- (67) 前掲書、一二六—七ページ。
- (68) 小野一一郎、前掲論文、第八十一卷第三号、三—九ページ。  
日本銀行調査局編、前掲書、一七二ページ。
- (69) 松岡孝児『金為替本位制の研究』日本評論社、東京、昭和一一年、二〇六—七ページ。